

防風通聖散 (黄帝素問宣明論方)

組成

当帰・芍薬・川芎・山梔子・連翹・薄荷葉・生姜・荊芥・防風・麻黄 各1.2、大黃・芒硝 各1.5、白朮・桔梗・黄芩・甘草 各2.0、石膏 3.0、滑石 5.0

主治

風熱壅盛・表裏俱実

効能

疏風解表・瀉熱通便

プロフィール

本方は、金元医学の四大家の一人、劉河間の創方になるもので、出典は『黄帝素問宣明論方(宣明論)』である。日本では、『衆方規矩』や『古今方彙』(共に中風門)に記載されており、江戸時代よりしばしば用いられる処方であったが、大正から昭和期に一貫堂の森道伯が多用し、その後も門人らがしばしば使用し一般化した。一貫堂では「臓毒証体質」の代表処方であり、中国では表裏双解剤のうち、解表攻裏剤に位置づけられている。方名の示すように、もとは散剤として生姜と一緒に煎じて服用することになっていたが、現在では通常の湯剤として煎服することが多い。

方解

本方は、『医学入門』に「風疾を防ぐ(防風)こと、聖に通達する(通聖)が如し」と述べられているように、内風・外風を問わず、風、特に風熱による病態に用いるが、基本的には、表の風邪を除き、裏の熱を清解・瀉下するという2つの作用の方向性を持っている。

防風、荊芥、麻黄、薄荷は、体表の風邪を汗によって発散する。大黃、芒硝は裏熱を通便によって瀉下し、山梔子、滑石は瀉火利湿し、この2方面の薬物によって大小二便より裏熱を体外に排除する。また、黄芩、桔梗、連翹、石膏は体内(肺胃)の鬱熱をさます。一方、当帰、川芎、芍薬は養血活血し、かつ生じた内風を治め、白朮は健脾燥湿し、甘草の益気健脾と合して正気を保護する(苦寒薬の使用による脾胃の損傷を防ぐ)。また甘草は諸薬を調和する。

四診上の特徴

本方は、本来何らかの感染症を想定して創方されたと思われる。しかし、現在ではさまざまな疾患に応用されており、疾患によって四診上の特徴も様ではない。本邦では、森道伯の一貫堂医学の考え方が普及しており、慢性病に広く応用されている。矢数格著『漢方一貫堂医学』の述べる四診所見はだいたい以下のようである¹⁾。

望診については、「皮膚が黄白色を呈するものを特色とし、日本人で色白のものに多い。壮年期以降の飲酒家は赤ら顔を呈する者もあるが、他の部分の皮膚はやはり白い。赤色を帯びるのは瘀血のあるあかしであるから、通導散その他を兼用しなければならない」、「体格は一般に筋骨たくましく、脂肪型あるいは筋肉型が多い」、「一見して将来脳溢血を起こす危険を感じる風貌をそなえた者」などを標準にすると述べている。

脈は原則として弦、洪、実である。しかし病状によっては異なることもある。

腹診では、以下の三型を紹介している。

- 全腹筋の硬満、特に臍を中心とする部分に著明に緊満した状態を呈するものがある。
- 腹部一円に濡満したもの、すなわち、腹筋の緊満を触れないもの。
- 軟弱な腹で防風通聖散を用いることがあるが、この場合は一つの異型、変証と見るべきものである。

矢数道明は、『臨床応用漢方処方解説』で、「本方は、臍を中心として腹が充満し、俗にいう太鼓腹・重役腹といわれる腹証を呈し、便秘がちで、脈腹ともに充実して力があるものである。ただしそれほど肥満者でなくても、本方の適応するものがある。慢性の皮膚病などによく見られ、本方を服用しているうちにその正証が現れてくることがある」と述べている²⁾。

使用上の注意

ときに薬剤性肝障害、間質性肺炎や色素沈着などの副作用がある。

臨床応用

応用範囲の広い薬剤で、さまざまな疾患の治療薬として用いられる。一貫堂では、病態に応じ、通導散や竜胆瀉肝湯、荊芥連翹湯等と合方することがある。基本的に体力が充実して、下剤に耐えられることが前提であるが、場合によっては一日量を少なくするか、大黃、芒硝を減じて使用

する。

日常の臨床では炎症性疾患に用いる場合と生活習慣病等の体質改善を目的とする場合がある。いずれの場合も胃腸が丈夫なことが前提となる。炎症では病邪が強く、炎症や代謝が亢進し、しかも発汗が上手く機能しないために熱がこもった状態を、発汗、瀉下、利尿で改善する。

■生活習慣病全般

本方は、一貫堂では「臓毒証体質」の改善を目的として用いられている。一貫堂の臓毒証体質とはいわゆる卒中体質のことで、若い頃は頑健であり病気にかからないが、中年以後になると、高血圧症などの生活習慣病を発しやすい体質のことである。本方は、こうした素因を有するものが、食毒(現代的に言うと、高栄養価食品の過食による肥満、高脂血症など)を体内に生じて発した疾病や病態に対して用いられる³⁾。

糖尿病は、食事の不摂生と運動不足が誘因であるから、この状態を食毒と見て本方を使用することが行われている。また、脂肪肝や高脂血症も同様に食毒に原因を求めることができる。

肥満に対する本方の効果に関しては、いくつかの研究がある⁴⁻⁶⁾。吉田らの研究によれば、メカニズムとして、本方の褐色脂肪細胞での脂肪燃焼・熱産生促進作用等が考えられている⁶⁾。

高血圧症にもしばしば使用される。細野らは、3ヵ月以上経過を観察できた高血圧症患者130例に対し、防風通聖散、真武湯、大柴胡湯、柴胡加竜骨牡蛎湯、釣藤散などの処方を用い、その効果を観察している。それによると、防風通聖散を投与した患者では、81.5%に血圧降下が見られたと報告している⁷⁾。

痛風の治療にも応用されることがある。

痰湿を伴う場合には、燥湿化痰の二陳湯を合する。

■呼吸器疾患

黄色で粘稠の喀痰を伴う急性の咳嗽など、痰熱壅肺による気管支炎に用いる。また、気管支喘息に麻杏甘石湯や小青竜湯と合して使用されることがある。特に大人の喘息では体質改善薬として期待できる。

■神経系疾患

多くの書物が、本方を「中風」の項目に分類していることからわかるように、抗動脈硬化作用や降圧作用を介して脳血管障害の予防や発症後の全身状態管理に使用される。また、頭痛や肩こりにも時に使用される。

■皮膚疾患

風熱によって発症した皮膚化膿症、湿疹、蕁麻疹、にきび、アトピー性皮膚炎、尋常性乾癬、掌蹠膿疱症、酒皸等に応用される。ただ、燥湿作用が比較的弱いので、滲出物が多いときには、黄連解毒湯や竜胆瀉肝湯を合する。

花輪は、「こじれた皮膚疾患には体格に関係なく防風通聖散が奏効することがある。体内の病理的産物を汗、尿、大便を通じて体外に排泄させて治癒機転を鼓舞する処方である。便秘がなければ大黃・芒硝はいれない」と述べている⁸⁾。

矢数格は、全頭の禿頭症に対して本方と荊芥連翹湯の合方を用い、見事に治癒せしめた症例を報告している¹⁾。

山口らは、各種の皮膚疾患に対して漢方製剤を投与し、本方が慢性蕁麻疹や湿疹・皮膚炎に有効であったと述べている⁹⁾。そのほか、難治性の皮膚疾患、慢性蕁麻疹に対するketotifenと漢方製剤との併用効果、アトピー性皮膚炎などの報告がある¹⁰⁻¹²⁾。

■その他

大黃、芒硝を含む製剤であるので、下剤として便秘に使用される¹³⁾。また、痔疾にも応用される。さらに、便通改善で腹圧を下げることによりヘルニアの治療にも応用されることがある。

婦人科疾患では、不妊症に応用されることがある。佐藤らは、肥満を伴う無排卵症10例に対し、本方と排卵誘発剤を併用し、症例あたりで30%、周期あたりでは25%の排卵を認め、1例に妊娠を経験したという¹⁴⁾。また、月経異常に稀に使用される。

整形外科的な疾患として、神経痛、腰痛や膝関節痛に使用されることがある。

腎・泌尿器疾患では慢性腎炎、慢性腎不全に対して応用されることがある。また、尿路結石の予防にも使用される。

中耳炎、耳鳴などに応用されることがある。

その他、関節リウマチ、変形性膝関節症、肝炎、肩こり、眼科不定愁訴、癲癇、慢性期分裂病患者、慢性副鼻腔炎などの症例報告や研究がある。

注)

一貫堂医学について

明治～昭和にかけて活躍した森道伯(1867～1931)が体系化した医学を、その薬室にちなんで一貫堂医学という。一貫堂医学では人間の体質を、「血証」、「臓毒証」、「解毒証」に分類して処方を割り当てたが、防風通聖散はこれの中で「臓毒証」の治療薬に位置づけられている。

<引用文献>

1. 矢数格：漢方一貫堂医学 p 33-35 医道の日本社 1964.
2. 矢数道明：臨床応用漢方処方解説 p 516-521 創元社 1966.
3. 坂東正造：病名漢方治療の実際 p 193-194 メディカルユーコン 2002.
4. 林盈六：肥満の漢方治療 現代東洋医学 7(4)：19-24, 1986.
5. 秋山俊治ほか：β3-adrenergic receptor遺伝子変異を伴う肥満患者に対する防風通聖散の効果 Digestion and Absorption 21(2)：159-162, 1998.
6. 吉田俊秀：防風通聖散の抗肥満機序解明に関する研究 第6回京大漢方医学セミナー.
7. 細野史郎ほか：高血圧症の東洋医学的治療(続報) 日本東洋医学会誌 8(3)：81-90, 1957.
8. 花輪寿彦：漢方診療のレッスン p 196 金原出版 1995.
9. 山口全一ほか：各種皮膚疾患に対する医療用漢方製剤の使用経験 医学と薬学 10：299-313, 1983.
10. 大沢清ほか：皮膚疾患における漢方薬の使用経験 漢方医学 8(3)：23-25, 1984.
11. 大川章：慢性蕁麻疹に対するKetotifenと漢方製剤との併用による臨床効果 診断と新薬 24：923-930, 1987.
12. 東一紀：アトピー性皮膚炎の漢方治療―自験138例の解析 日本東洋医学雑誌 45(5)：93, 1995.
13. 松生恒夫ほか：大腸メラノーシスを伴う常習性便秘症例に対する防風通聖散の効果 漢方と最新治療 5：195-199, 1996.
14. 佐藤芳昭ほか：肥満を伴う無排卵症に対する防風通聖散の投与効果 漢方医学 8(2)：21-23, 1984.